

SNS 利用はオフライン／オンライン 社会関係資本を醸成するか¹⁾

——大学生の mixi 利用を事例に——

寺島 圭^{*2)}・三浦 麻子^{**}

抄録：本研究では、SNS の利用が社会関係資本の醸成に与える影響を、大学生の mixi 利用状況を事例として検討した。大学生を対象とした質問紙調査を実施し、mixi の利用状況、社会関係資本の認知、社交性、個人属性などに関するそれぞれの質問への回答を求めた。3 つの社会関係資本の認知を従属変数とした重回帰分析の結果、オンライン上の社会関係資本の認知には mixi の利用状況が、オフライン上の社会関係資本の認知には社交性が、それぞれ影響していた。また、オンラインの社会関係資本には mixi の利用と社交性の交互作用効果があり、社交性が低い個人において、mixi の活発な利用が社会関係資本を醸成していた。この知見は先行研究の「貧しいものはより富める」仮説を支持しており、また Facebook を対象とした研究の結果と部分的に一致していた。本研究で得られた知見から、SNS 利用が対人関係に及ぼす影響を議論した。

キーワード：social networking services, 社会関係資本, インターネット, 対人関係

問 題

近年 Facebook や mixi などの SNS (social networking services) は多くの人に用いられており、友人・知人を含めた様々な人と交流する場として活用されている。このような SNS の利用は、対人関係の認知にどのような影響を及ぼすだろうか。本研究では、対人関係認知の一側面として社会関係資本の認知をとりあげ、SNS の利用がどのように影響するか、大学生の mixi 利用を例にとり、検討する。

そもそも、SNS とはどのように定義されるだろうか。boyd & Ellison (2008) は、“人々に、(1) 限られたシステムの中で他の全ユーザーに公開の、あるいは限定されたメンバーに公開のプロフィールを作り、(2) つながりを持った他のユーザー (= 友人) のリストを作成し、(3) 他のユーザーが有しているユーザー同士のつながりや、彼らの作成したリストを閲覧した他のユーザーのプロフィールを縦横無尽に行き来する、ということをも可能にする Web を基盤としたサービス” (boyd & Ellison, 2008, p.211) と定義している。つまり、SNS の特徴は、自身の友人だけでなく他のユーザーの友人とも交流を持つことができる点と、自身の有する社会ネットワークをある程度可視化できる点であり、人間関係ネットワークを拡張させる可能性が高いということにある。また、投稿などによる継続的なやり取りは SNS 上での友人関係をより強固なものにするとともに、公開プロフィールは友人の友人などの通常は知り合う機会のほとんどない

他者との関係形成を促すため、人々の有するネットワーク構造に内在するとされる社会関係資本 (social capital) を醸成する可能性がある。

社会関係資本は、多くの学問分野において様々に議論されてきた概念であり、議論の際に立つ視座や分野の違いによって様々に定義されている。本研究では SNS を介して行われる対人間のコミュニケーションを扱うため、ネットワーク的な観点からの社会関係資本の定義を採用する。このような観点から社会関係資本を論じた研究者の中で、たとえば社会学者 Coleman (1988 金光淳訳 2006) は、社会関係資本を“行為者間の関係の構造に内在”し、“その構造内における行為者の何らかの行為を促進する”ような、社会構造そのものを指すものとして定義した (Coleman, 1988 金光淳訳 2006, p.209)。彼はまた、社会関係資本の重要な構成要素として、恩義や期待・構造の信頼性、情報への潜在力、規範と裏切りに対する効果的な制裁、の3つを挙げている。さらに、彼の議論を引いて社会関係資本を政治学的な議論へと展開した Putnam (1993) は、一般的な互酬が互いへの信頼を醸成することと、そのことによって育まれる社会関係資本が持つ公共財的な側面を強調した。

以上のように、人々のネットワークやそこに内在する信頼・互酬性として定義される社会関係資本は、2つの類型に分類される (Putnam, 2000)。1つは「結束型 (bonding)」であり、個人の属するネットワーク内部の結束を高め、諸個人間の信頼や援助を引き出すような強固な関係性である。一方の「橋渡し型 (bridging)」は個

*関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程

**関西学院大学文学部教授

人の属する集団の外部へつながるネットワークやその関係性を指し、相対的に弱い関係性を指す。橋渡し型社会関係資本は、普段あまり接触しない他者との関係構築を可能にするため、外部から冗長性の低い情報を引き出すことができるという特徴を持つ。さらに Ellison, Steinfield, & Lampe (2007) は、「関係維持型 (maintained)」という社会関係資本の第三の分類を提案している。この概念は、新しい環境へ適応していく際に、旧来から存在する知り合いや友人の存在が重要であるという考えの下、それらがどの程度維持されているかを社会関係資本の一側面として捉えようとするものである。

本研究では、この「結束型」、「橋渡し型」、「関係維持型」の3類型によって社会関係資本を捉える。また、SNS上で実現する友人関係には、オフライン（対面）の友人との交流がオンライン上にも持ち越されている場合、オンライン上での交流がオフライン上にも持ち越された場合、オンライン上の友人とオンライン上でのみ交流がなされている場合の三通りが存在する点（あるいは、オフラインとオンラインで交流そのものに質的な差異がある可能性）を踏まえ、オフラインとオンラインでの社会関係資本の違いにも着目する。よって、（オフラインでの対人関係において旧来の友人がどの程度維持されているかを示す概念であるためにオフラインとオンラインを区別しない）「関係維持型」を除き、「結束型」と「橋渡し型」はそれぞれオフラインとオンラインに分類し、全部で5つの社会関係資本について検討する。

社会関係資本がオンライン上の関係によって促進されることを示した研究は多くある。たとえば小林・池田 (2006) は、オンラインゲームのユーザーを対象にした調査によってその利用行動やユーザーのネットワークサイズの大きさなどが社会関係資本を高め、さらにオンライン上で醸成された社会関係資本がオフラインでの社会参加につながるという、社会関係資本の「汎化」効果を示した。また Ellison et al. (2007) は、Facebook を活発に利用している学生ほど社会関係資本が高く、この傾向は生活満足感や自尊心の低い学生において顕著にあらわれた、という知見を報告している。さらに Steinfield, Ellison, & Lampe (2008) によるパネル調査では、Facebook の利用が社会関係資本を上昇させる、という因果関係の存在が報告されている。

本研究では、大学生の mixi 利用を事例に SNS が対人関係に与える影響を検討する。mixi は 2004 年にサービスを開始した日本の SNS であり、互いに友人（＝マイクシイ）として登録したユーザー同士が自分のページに登録したプロフィールや、日記、つぶやきなどを Web サイト上で公開し合うことができる（実際の mixi の画面を Figure 1 に示す）。

日記などを mixi 上にアップロードすることを「投稿」

と呼ぶが、各ユーザーは文章や写真、動画を投稿することができ、友人の投稿には「イイネ！」ボタンをクリックすることで反応したり、「コメント」という形で投稿に対して感想や意見を述べる事が可能である。また、mixi にリンクしている外部 Web サイトから、その Web サイトについてのコメントやそのサイトの URL を mixi 上に投稿することも可能である。さらに、ユーザーが自身の関心に基づいて簡易 BBS（電子掲示板）を作成できる「mixi コミュニティ」や、mixi ユーザーを対象としたブログを作成できる「mixi ページ」など、多くのコミュニケーションツールが用意されている。

当初 mixi は既存ユーザーに招待されることでのみユーザー登録ができる「招待制」を採用しており、また利用可能年齢は 18 歳未満の者のユーザー登録ができないという制限が設けられていたが、2008 年 12 月に招待制から登録制に、また 2009 年春には年齢制限が 15 歳未満の利用の禁止に変更された。こうした年齢制限の緩和時期は、本研究の調査対象者（90% が大学 1, 2 年生）が高校生であった時期と重複している。そのため、調査対象者の mixi 利用には、大学の友人だけでなく高校時代以前の友人との交流が含まれており、かつ彼らのマイクシイも大学と高校両方の友人関係を含んでいることに留意する必要がある。

また、mixi の特徴に、ユーザー登録時に表示されるプロフィール入力画面において「ニックネーム」の登録が要求され、多くのユーザーは本名ではなくニックネームで mixi を使用しているという点がある。よって、mixi において友人を探した mixi 上で友人になるためには、携帯電話や PC のメールアドレスを用いたユーザーの検索か、当該利用者のニックネームを知った上でそれを検索する、という手続きを必要とする。このような特徴があるため、マイクシイは多くの場合実際の友人、しかもメールアドレスか mixi でのニックネームを知っている比較的仲の良い友人や知り合いが多くなる傾向があると考えられる。

では、こうした特徴をもつ mixi という SNS の利用はどのように社会関係資本を醸成するのだろうか。本研究では、大学生に「自分自身がどの程度の社会関係資本を有しているか」に関する認知を問うことで、この問題について検討する。SNS 上の友人関係には、(1) オンライン上にそのまま持ち越されたオフライン上の知り合いや友人、(2) オンライン上で知り合いその後オフラインに持ち越された知り合いや友人、(3) オフラインでは知り合いではないがオンライン上でのみ交流のある知り合いや友人、という三種類の関係がありえる。しかし平成 23 年版の情報通信白書によれば、「もともとの知人とのコミュニケーションのため」に SNS を使っているとした回答者が 43.9% であるのに対して、「自分の交友関係を



Figure 1 mixi の画面の例

広げたいと思ったから」という理由で SNS を利用しているのは 14.6% にすぎない。このことから、SNS 上で実現する友人関係は元々オフライン上の知り合いであるものがオンラインに持ち越された関係が多い、と考えるのが自然である。もちろん「友人の友人」といった新しい関係が mixi 上で形成されることもあるかもしれないが、その場合にも、その人とオフライン上で知り合ってから互いにマイミクシイとなることが多いと考えられる。つまり、mixi は既存の友人同士がオンライン上においても仲を深め合うという目的に適ったツールであると考えることができる。

このことから、mixi の利用は既存の友人同士の結束を高めると考えられる。つまり、mixi を活発に利用する人ほどオフラインにおける結束型の社会関係資本が高いだろう。また大学では、所属している学部学科以外にも部活やサークル、アルバイト先など多様な集団へのアクセス可能性が高く、またそれらの間の境界も曖昧な環境においては、既存の友人関係の強化が、その友人の属

する別のネットワークへの接続可能性を高めるだろう。つまり、活発な mixi の利用は、外部との関係性の構築にプラスの影響を及ぼし、オフラインにおける結束型のみならず橋渡し型の社会関係資本をも高めるだろう。以上より、mixi をよく利用している人ほどオフラインにおける結束型および橋渡し型双方の社会関係資本が高い、と予測できる（仮説 1）。

次に、個人特性との関連については、次のような仮説を設定することができる。多くの SNS では、他のユーザーを友人登録する際には友人申請を送ることとそれが相手から承認されることが必要であり、この申請手続きには一定の社交性や外向性が要求されると考えられる。しかし、友人関係を臆せず拡大でき、なおかつ積極的に他者と交流できる個人のみが SNS 利用によって友人を増やすことができるかという点、そうとは限らないということが先行研究で示されている。たとえば McKenna, Green, & Gleason (2002) は、社会的不安や孤独感の高い人はオンライン上での対人関係に本当の自分を見出

し、そうすることでよりオンライン上の関係にコミットしていくことを示している。この研究から分かるのは、対人関係に積極的でない個人でもオンライン上においては効率的に関係形成を図れる、ということである。また、SNS 利用が社会関係資本に与える影響を検討した Ellison et al. (2007) は、生活満足感や自尊心の低い個人の方が、それらが低い個人よりも Facebook を利用することで橋渡し型の社会関係資本が高くなる、という結果を報告している。これは「富める者はより富める (rich get richer)」仮説 (Kraut, Kiesler, Boneva, Cummings, Helgeson, & Crawford, 2002) と対比され、「貧しい者はより富める (poor get richer)」仮説と呼ばれている。Ellison et al. (2007) はオンライン、特に SNS の利用が対人関係に非積極的な個人の対人関係形成を助ける可能性を示したが、彼らが指摘する「貧しい」とは生活満足感や自尊心が低いことを指しているため、対人関係への積極性を直接検討できていない。本研究では、SNS が対人関係形成の際の障壁を下げるかどうかということをより明確に述べるためには対人関係への積極性を直接示す個人特性に焦点をあてるべきであると考え、社交性に着目する。社交性が低い個人は高い個人よりも対人関係にあたってより不安を感じやすく消極的であると考えられるが、mixi のような非対面コミュニケーションはこういった消極性を緩和する可能性がある。よって、mixi の利用がオフライン／オンライン橋渡し型社会関係資本を醸成する効果は、社交性が高い個人よりも低い個人の場合においてより強く見られるだろう (仮説 2)。

方 法

調査の概要

2011 年 7 月 23 日と 7 月 26 日の 2 回、弘前大学の学生を対象とした質問紙調査を実施した。調査対象者は 370 名 (性別：男性 146 名、女性 222 名、不明 2 名、年齢： $M=18.61$, $SD=0.70$) であり、有効回答数は 369 であった。質問紙は同大学の基礎科目の受講者に配布、講義の冒頭の時間に回答を求め、講義終了時に回収した。

個人属性 個人属性として、性別、所属学部、年齢、友人数、一日のインターネット利用時間 (「数分程度」から「6 時間以上」まで 7 件法)、居住形態 (「実家」, 「マンション・アパートで一人暮らし」, 「寮」, 「下宿」), 通学時間 (「30 分未満」から「120 分以上」まで 5 件法) を尋ねた。

mixi 利用 mixi 利用についてはまず mixi の登録の有無を問い、利用している場合は、利用期間 (「1 年未満」から「7 年以上」まで 5 件法)、主な利用端末 (「PC」か「携帯電話 (iPhone, iPad, スマートフォン含む)」), 利用頻度 (「数ヶ月に数回かそれ以下」から「ほぼ毎日・1 日に数十回かそれ以上」まで 6 件法)、一日の利用時間

(「10 分未満」から「3 時間以上」まで 6 件法)、登録している友人 (マイミクシイ) の数、マイミクシイ中のネット上のみの友人数、mixi コミュニティへの参加件数、利用する主な目的 (「自分のマイミクシイと交流するため」「新しい友人関係を広げるため」「自分ひとりでは得られそうにない情報を得るため」「アプリ・ゲームで遊ぶため」) を尋ねた。また、利用に関する意識について、「mixi は自分の日常生活の一部だ」「自分が mixi を利用していることを自信を持って他人に言える」「mixi を閉じるときもう少し使っていたいという気持ちになる」の各項目をそれぞれ「とてもそう思う」から「そう思わない」の 4 件法で尋ねた。

個人特性と社会関係資本 社交性は、和田 (1996) の Big Five の外向性尺度から抽出した 2 項目によって測定した。自分自身が社交的であると考えている程度を見るために「社交的」を、自分自身のより一般的な積極性を測る指標として「活動的」を用い、それぞれ「私は社交的な人間だ」と「私は活動的な人間だ」という項目を作成して、「とてもそう思う」から「そう思わない」の 4 件法で尋ねた。社会関係資本の認知に関しては、Williams (2006) の作成したオフライン／オンライン結束型・橋渡し型の社会関係資本尺度と Ellison et al. (2007) の関係維持型の社会関係資本尺度を、それぞれの研究で行われた因子分析において各タイプの社会関係資本をあらわす因子に高い負荷量を持つ上位 3 項目を取り出し、著者が日本語に翻訳して、それぞれ 4 件法で尋ねた (項目内容は Table 1 参照)。

結 果

まず、社会関係資本 (本節では以降 SC と表記) 尺度の因子分析の結果と各因子の信頼性係数 (Cronbach の α)、抽出された各因子間の相関係数を Table 1 に示す。

因子の抽出には一般化された最小二乗法を用い、プロマックス回転後の因子パタン行列から因子の解釈を行ったところ、先行研究で示された 5 因子が抽出された。ただし、「私と対面上の関係で付き合ってくれる人は、私の評判を高めてくれるだろう」という項目の共通性は 0.33 と低かったため、解釈からは除外した。

次に、仮説の検証を行うために、個人属性、mixi 利用に関する項目 (マイミクシイ登録人数、利用歴、主な利用端末)、mixi 利用度、社交性、mixi 利用度と社交性との交互作用項 (仮説 2 の検証のため) を独立変数、各 SC 尺度を従属変数とする重回帰分析をおこなった。分析対象としたのは、有効回答 369 名のうち調査実施時に mixi に「登録している」と回答した 146 名である。なお、社交性と各 SC 尺度は回答値を合計し平均した値を用いた。「マイミクシイ登録人数」は分布の偏りを補正するために、対数変換をおこなった。「mixi 利用度」

Table 1 SC 尺度の因子分析と因子間相関^{a)}因子分析結果（最小二乗法，プロマックス回転， $N=358$ ）

質問項目	第一因子 (オフライン 橋渡し型)	第二因子 (オンライン 橋渡し型)	第三因子 (オフライン 結束型)	第四因子 (オンライン 結束型)	第五因子 (関係維持型)	共通性
対面で人と付き合うことは、私に新しいことに挑戦したいと思わせてくれる	.86	-.02	.02	-.11	.01	.70
対面で人と付き合うことは、私に世界の他の場所に対する興味を抱かせてくれる	.90	-.08	-.08	-.07	.00	.71
対面で人と付き合うことは、私により大きな世界とつながっていると感じさせてくれる	.68	.05	.03	.05	.01	.54
インターネット上で人と付き合うことは、私に新しいことに挑戦したいと思わせてくれる	.31	.54	.01	.05	-.06	.60
インターネット上で人と付き合うことは、私に世界の他の場所に対する興味を抱かせてくれる	-.11	.98	.05	-.05	.08	.83
インターネット上で人と付き合うことは、私により大きな世界とつながっていると感じさせてくれる	.09	.64	-.06	.13	-.04	.52
対面上の関係で、私の問題を手助けしてくれると信じられる人がいる	-.03	.07	.76	-.01	.02	.58
重要な判断をするときにアドバイスを求めることができる人が対面上の関係にいる	-.03	.01	.91	.03	.00	.86
私と対面上の関係で付き合ってくれる人は、私の評判を高めてくれるだろう	.27	-.21	.13	.34	.11	.33
インターネット上には私の問題を手助けしてくれると信じられる人がいる	-.03	.00	.09	.80	-.06	.67
重要な判断をするときにアドバイスを求めることができる人がインターネット上にいる	-.12	.02	-.04	.89	.03	.75
私とインターネット上で付き合う人は、私の評判を高めてくれるだろう	-.03	-.03	-.07	.73	-.02	.47
必要な時に、高校時代の同級生に小さな手助けを頼むことができる	.02	.00	.16	-.08	.66	.54
違う街に旅行する場合、高校時代の同級生の家に泊まることができる	.00	.05	-.10	-.03	.81	.57
高校時代の同級生から、仕事やインターンシップに関する情報を得ることができる	-.03	.05	-.06	.11	.64	.43
因子寄与	2.22	1.73	1.49	2.14	1.53	

^{a)}各因子の α 係数は、第一因子 ($\alpha=.82$)、第二因子 ($\alpha=.82$)、第三因子 ($\alpha=.81$)、第四因子 ($\alpha=.83$)、第五因子 ($\alpha=.73$)。

因子間相関

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
オフライン橋渡し型 (1)	—				
オンライン橋渡し型 (2)	.61	—			
オフライン結束型 (3)	.16	.01	—		
オンライン結束型 (4)	.22	.15	.53	—	
関係維持型 (5)	.17	-.05	.58	.44	—

Table 2 SC 尺度を予測する重回帰分析^{a)}

従属変数	オフ橋渡し型 β	オン橋渡し型 β	オフ結束型 β	オン結束型 β	関係維持型 β
切片	5.04***	1.21	5.20***	1.86	2.62*
性別 (0=男性, 1=女性)	0.15	-0.13*	0.20*	0.07	0.25**
年齢	-0.06	0.05	-0.09	0.01	0.01
インターネット利用時間	-0.12***	0.05*	-0.06 +	0.07	-0.07*
マイミクシ登録人数	0.00	-0.02	-0.02	-0.05	0.06 +
mixi 利用歴	0.05	-0.01	0.05	0.09	0.09
mixi 利用端末 (0=PC, 1=携帯端末)	-0.34*	0.08	-0.11	-0.13	0.09
mixi 利用度	-0.06	0.09*	0.05	0.23**	-0.08
社交性	0.14**	0.00	0.17***	0.09	0.10*
社交性×mixi 利用度	-0.04	-0.08**	-0.02	-0.14*	-0.03
n	137	138	137	138	137
R^2	0.24	0.17	0.20	0.17	0.18
自由度調整済み R^2	0.18	0.11	0.15	0.11	0.12

^{a)} + $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$.

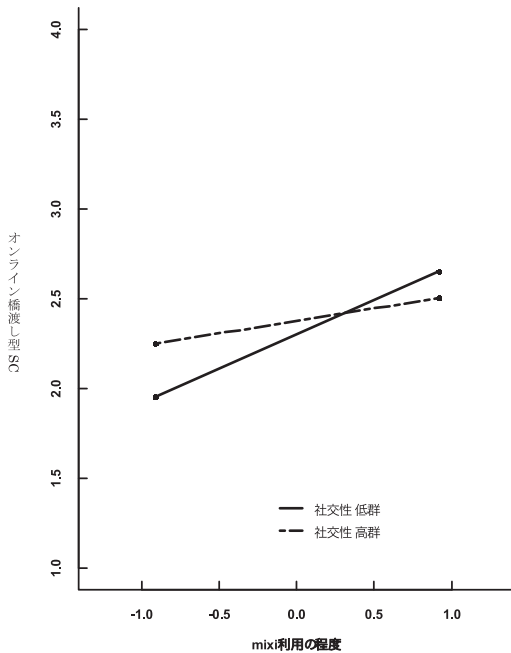


Figure 2 社交性と mixi 利用度の交互作用（オンライン橋渡し型 SC）

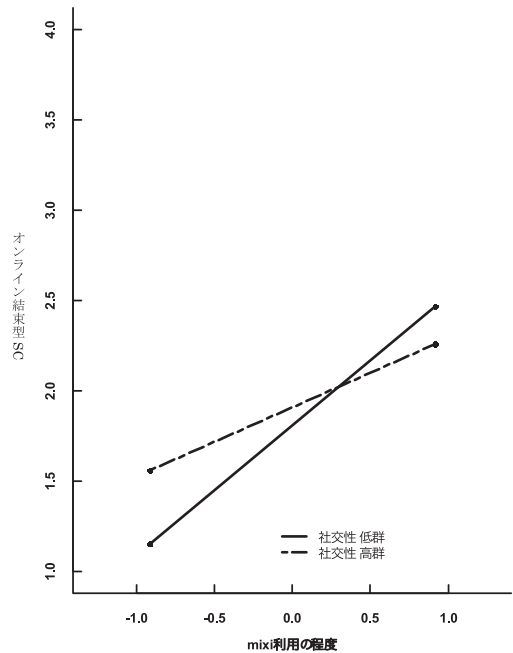


Figure 3 社交性と mixi 利用度の交互作用（オンライン結束型 SC）

は、Ellison et al. (2007) が Facebook 利用の熱心度を算出した計算方法を参考にして mixi の利用時間、利用頻度、利用の意識に対する回答値を加算することで算出したが、項目間にスケールの違いがあり単純加算は適切ではないと判断して、項目ごとに標準化した値を算出した上で合計値を求めた。

各 SC 尺度を従属変数とした重回帰分析の結果を Table 2 に示す。いずれのモデルも F 検定の結果は有意であり、また多重共線性は生じていない。

オフライン橋渡し型 SC 得点に対しては、インターネット利用時間が長いほど低く、PC で mixi を利用しているほど低く、社交性が高いほど高い、という結果であった。オンライン橋渡し型 SC 得点は、女性の方が低く、インターネット利用時間が長いほど高く、mixi 利用度が高いほど高く、また社交性と mixi 利用度は負の交互作用があった。オフライン結束型 SC 得点は、女性の方が高く、インターネット利用時間が長いほど低く、社交性が高いほど高かった。オンライン結束型 SC 得点は、mixi 利用度が高いほど高く、また社交性と mixi 利用度は負の交互作用を有していた。関係維持型 SC 得点は、女性の方が高く、インターネット利用時間が長いほど低く、マイミクシイ登録人数が多いほど高く、社交性が高いほど高かった。

オンライン橋渡し型 SC 得点とオンライン結束型 SC 得点に対して有意な影響力をもつことが確認された 2 つの交互作用の様相を図示したのが、Figure 2 と Figure 3

である。Figure 2 より、mixi 利用度がオンライン橋渡し型 SC 得点に与える正の影響は、社交性の低い個人でより顕著に表れている。また Figure 3 から、mixi 利用度がオンライン結束型 SC 得点に与える正の影響も、社交性の低い個人でより顕著にみられる。

考 察

仮説の検証の結果

仮説 1 (mixi をよく利用している人ほどオフラインにおける結束型および橋渡し型双方の社会関係資本が高い) については、mixi 利用度はオフライン橋渡し型、オフライン結束型社会関係資本に有意な影響力をもっておらず、支持されなかった。これにはいくつかの理由が考えられる。まず、本研究の調査対象者のうち mixi に登録していたのは全体の 39.5% にすぎなかった。これは、Ellison et al. (2007) の研究での Facebook 登録率 (94%) よりもかなり低い。つまり本研究の対象者においては、mixi を利用することで育まれるオンライン上の社会関係資本が、その普及率の低さのためにオフラインでの社会関係資本へと広がらなかった可能性が示唆される。mixi 利用がオンライン社会関係資本に対しては有意な正の影響を有していたという結果は、この解釈を支持する証拠の一つとなるかもしれない。次に、オフラインの各社会関係資本得点がオンラインに比べて高い水準にあり天井効果が出た、という理由が考えられる。1 点から 4 点の範囲をとる中で、オフライン橋渡し型社会

関係資本 ($M=2.93$, $SD=0.63$) とオフライン結束型社会関係資本 ($M=3.09$, $SD=0.59$), 関係維持型社会関係資本 ($M=3.09$, $SD=0.67$) は分布が高い方に偏っている一方、オンライン橋渡し型社会関係資本 ($M=2.30$, $SD=0.35$), オンライン結束型社会関係資本 ($M=1.81$, $SD=0.66$) は分布が平均よりやや低い方に偏っている。このことがオフラインの各社会関係資本に影響が見いだされなかった要因の一つと考えることができる。このようにオフラインの社会関係資本が相対的に高かったのは、調査対象者が高校からの友人関係を大学にも引き継いでいて、そのことがオフラインで社会関係資本を有しているという認知につながったからと考えられる。

次に、仮説2 (mixi を利用することによるオフライン／オンライン橋渡し型社会関係資本への影響は、社交性の高い個人よりも低い個人の場合により強くなる) は、mixi 利用度と社交性の交互作用はオフラインの橋渡し型社会関係資本に対して有意な影響を持たない一方で、オンラインの橋渡し型社会関係資本に対しては有意な影響力があり、部分的に支持された。つまり、SNS が対人関係形成での壁を取り除く効果は、少なくとも mixi 利用においては、あくまでもオンライン上の関係に限定されたものであったと言える。この結果は Ellison et al. (2007) の研究結果を部分的に支持している。ここで重要なのは、調査対象者の mixi における対人関係はオフラインでの対人関係とかなりの部分重複している、ということである。マイミクシイ中のネット上のみの友人数を尋ねた設問で、mixi に登録している 146 名中 91 名 (62.3%) が 5 名以下と回答していた。この点を踏まえて交互作用効果のもつ意味を考えると、社交性の低い個人が mixi を熱心に使うことによって友人関係を形成していく壁は取り除かれるが、この効果は既存の友人とのオンライン上での親密な関係形成にとどまる、と言える。一方で、関係維持型の社会関係資本は、社交性が高い個人ほど高いが、mixi 利用の程度とは関係がない。つまり、mixi の利用はオンラインにおける対人関係上の壁を下げるが、既存の友人関係の維持には依然社交性が重要な役割を果たしていることが示唆された。ただし有意に近い傾向にとどまっているものの、マイミクシイの人数が多いほど関係維持型の社会関係資本は高い。これは、mixi の活発な利用は関係維持型の社会関係資本に影響しないが、mixi でマイミクシイを増やすこと自体は友人関係を維持する一つの手段として機能する可能性があることを示唆している。

本研究の展開と問題点

SNS が対人間のコミュニケーションを可能にすることを考えると、本研究をさらに発展させるには、日記などの投稿が引き出す相手からのリアクションがユーザー

にどのような影響を与えるか、という問題を検討する必要がある。この点に触れた研究として Forest & Wood (2012) は、SNS (Facebook) での投稿とそれに対する反応がユーザーにどう影響するかを自尊心との関連から検討した。その結果、低自尊心者は高自尊心者に比べて SNS を好んで使い、また SNS を自己開示にとって好ましい場であると考えるが、彼らのネガティブな投稿は皮肉にも SNS 上の友人から否定的に受け取られる可能性がある、ということを示した。他者からのフィードバックがネガティブなものかポジティブなものかは自身の評価に強く関連し、また SNS をさらに利用していこうという動機づけと関係すると考えられる。この点を本研究で得られた知見と関連づけて考察する。

本研究では、mixi を活発に利用することが社会関係資本を醸成する効果が、社交性の高い個人よりも低い個人でより顕著に見られた。Forest & Wood (2012) の知見は、社交性の低い個人がネガティブな投稿をした場合に、主観的には社会関係資本の上昇を認知していても現実には他のユーザーからの評価が下がっている、というギャップの存在を示唆している。社会関係資本の認知は精神的な健康を高める (Hamano, Fujisawa, Ishida, Subramanian, Kawachi, & Shiwaku, 2010; Mohnen, Groenewegen, Volker, & Flap, 2011) が、一方でネガティブな投稿による好意度の低下は他のユーザーからの否定的な反応を引き出し、ユーザーを SNS 利用から遠ざけることで社会関係資本の醸成を停滞させてしまうかもしれない。

ただし、本研究は SNS を利用することが社会関係資本の醸成にどう影響するかという一方向的な関係のみを想定したものであるため、これ以上の議論は難しい。今後は、SNS 利用と社会関係資本の醸成との関係をより詳細に明らかにするために、日記などの投稿に対する他者からの反応が SNS の利用を動機づけ、そのことがますます社会関係資本を醸成する、という双方向的な関係を想定して、主観的な社会関係資本の認知と他のユーザーからの評価がどう関連し合っているかを検討する必要があるだろう。具体的には、投稿に対する「イイネ!」ボタンのクリック数やコメントの数・内容に着目し、それらが社会関係資本の醸成に及ぼす影響を検討すれば、こうした双方向的コミュニケーションの効果を検証できるかもしれない。

本研究にはいくつかの限界ないし問題点が存在している。第一に、調査対象が地方都市の特定の大学であるという点が結果に大きな影響を及ぼしている可能性がある。調査対象者が所属する弘前大学では、多くの学生が地元の高校から進学しており、大学入学時にすでにある程度の友人ネットワークを学内に有している。また、市内の高校からの進学者が特に多く、オフラインコミュニ

ケーションの機会が比較的頻繁にあるために、SNS 上の交流がネットワークの維持に果たす役割があまり大きくない可能性もある。この点を考慮すれば、仮説 1 が支持されなかったのは、近隣に中学や高校からの友人関係がそもそも存在している学生が多いために、対象者のオフラインの社会関係資本が SNS 利用によらずともすでに十分に醸成されていたから、という解釈が可能かもしれない。実際、前述したようにオフライン社会関係資本に関する認知は全般的に高かった。これらのことを説明しうる概念の一つに、居住流動性がある。たとえば Seder & Oishi (2008) は、居住流動性の高さが Facebook の友人数の多さを予測することを示した。本研究の調査対象者はその居住流動性の低さゆえに、SNS 上で既存の(高校までの)友人関係以上の関係性の構築を求めなかったケースが多かったのかもしれない。しかし一方で、こうした地元の学生が多く入学する比較的小規模な大学で、Ellison et al. (2007) の、世界中から学生が集まる大規模な大学を対象とした調査と部分的に同じ結果が見られたということは、SNS が対人関係上の障壁を取り除く役割を果たしうる、という知見の再現性の高さを示しているとも言える。今後は、居住流動性の要因を統制することが可能なサンプルを集めた調査が必要である。

第二の問題点として、社会関係資本の尺度の問題がある。先述の通り社会関係資本は研究者によって多くの定義がなされている概念であり、その測定の方法も研究によって様々である。たとえば小林・池田 (2006) は社会関係資本を調査対象者の有するネットワークのサイズ、一般的信頼感、一般的互酬性によって測定している。また、諸個人のネットワーク規模や職業的な多様性 (Miyata & Kobayashi, 2008)、地域住民の社会参加や近隣住民とのネットワーク (谷口・松中・芝池, 2008) によって測定した研究もある。本研究では、認知的側面から社会関係資本を測定することを試みたが、主観的な評価はたしてどの程度現実の行動や実態を反映しているかという妥当性の問題はこの種の研究において常に問われる必要がある。認知的な社会関係資本だけでなく、ネットワークサイズや現実の社会参加の程度などの、現実に存在する社会関係資本をより正確に反映するような指標についても同時に測定し、両者の関係も検討する必要があるだろう。

本研究は、SNS の利用が社会関係資本の認知に与える影響を、大学生の mixi 利用を事例に検討した。SNS が、電話や PC メールなどのメディアと同様社会に大きなインパクトを与えるかどうかは現段階では不明だが、少なくとも SNS は日常世界の一部になりつつある。また、特定のコミュニティや限定的な個人を対象にした SNS も存在し、その社会的なインパクトは多様化しているだろう。SNS の利用が社会に何をもたらすか、今

後も検討していくべき課題である。

注

- 1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第 53 回大会 (筑波大学) において報告された。
- 2) 本研究は、2011 年に弘前大学人文学部に提出した卒業論文「大学生の SNS 利用と人間関係への認知との関連研究」を再分析し、加筆修正を行ったものである。卒業論文執筆の指導に当たってくださった、山口恵子先生と日比野愛子先生 (弘前大学人文学部)、データの分析などの際に貴重なご助言を頂いた石黒格先生 (日本女子大学人間社会学部) に、深く感謝いたします。

引用文献

- boyd, d., & Ellison, N. B. (2008). Social Networking Sites : Definition, History, and Scholarship. *Journal of Computer-Mediated Communication*, **13**, 210–230.
- Coleman, J. S. (1988). Social Capital in the Creation of Human Capital. *American Journal of Sociology*, **94**, 95–120. (コールマン J. S. 金光淳 (訳) (2006). 人的資本の形成における社会関係資本 野沢慎司 (編・監訳) リーディングスネットワーク論 第 1 版 勁草書房 pp.205–241.)
- Ellison, N. B., Steinfield, C., & Lampe, C. (2007). The Benefits of Facebook “Friends :” Social Capital and College Students’ Use of Online Social Network Sites. *Journal of Computer-Mediated Communication*, **12**, 1143–1168.
- Forest, A. L., & Wood, J. V. (2012). When Social Networking is Not Working : Individuals With Low Self-Esteem Recognize but Do Not Reap the Benefits of Self-Disclosure on Facebook. *Psychological Science*, **23**, 295–302.
- Hamano, T., Fujisawa, Y., Ishida, Y., Subramanian, S. V., Kawachi, I., & Shiwaku, K. (2010). Social Capital and Mental Health in Japan : A Multilevel Analysis. *PLoS ONE*, **5**. [http://www.plosone.org/article/info%3AAdoi%2F10.1371%2Fjournal.pone.0013214]
- 小林哲郎・池田謙一 (2006). オンラインゲーム内のコミュニティにおける社会関係資本の醸成—オフライン世界への汎化効果を視野に— 社会心理学研究, **22**, 58–71.
- (Kobayashi, T., & Ikeda, K. (2006). The development of social capital in communities in an online game : A perspective on a “spill over” effect into the offline world. *Japanese Journal of Social Psychology*, **22**, 58–71.)

- Kraut, R., Kiesler, S., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, V., & Crawford, A. (2002). Internet Paradox Revisited. *Journal of Social Issues*, **58**, 49–74.
- McKenna, K. Y. A., Green, A. S., & Gleason, M. E. J. (2002). Relationship Formation on the Internet: What's the Big Attraction? *Journal of Social Issues*, **58**, 9–31.
- Miyata, K., & Kobayashi, T. (2008). Causal relationship between Internet use and social capital in Japan. *Asian Journal of Social Psychology*, **11**, 42–52.
- Mohnen, S. M., Groenewegen, P. P., Volker, B., & Flap, H. (2011). Neighborhood social capital and individual health. *Social Science & Medicine*, **72**, 660–667.
- Putnam, R. D. (1993). *MAKING DEMOCRACY WORK: Civic Tradition in Modern Italy*. Princeton University Press.
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. Simon & Schuster, New York, NY.
- Seder, J. P., & Oishi, S. (2008). *Friendculture: Predictors of diversity in the social networks of college students*. Poster session presented at the annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Albuquerque, NM.
- Steinfeld, C., Ellison, N. B., & Lampe, C. (2008). Social Capital, self-esteem, and use of online social network sites: A longitudinal analysis. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **29**, 434–445.
- 谷口守・松中亮治・芝池綾 (2001). ソーシャルキャピタル形成とまちづくり意識の関連 土木計画学研究, **25**, 311–318.
- (Taniguchi, M., Matsunaka, R., & Shibaike, A. (2001). Does the Social Capital Support “New Public” Movement? *Infrastructure Planning Review*, **25**, 311–318.)
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61–67.
- (Sayuri, W. (1996). Construction of the Big Five Scales of personality trait terms and concurrent validity with NPI. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 61–67.)
- Williams, D. (2006). On and off the ‘Net’: Scales for social capital in an online era. *Journal of Computer-Mediated Communication*, **11**, 593–628.